

計画 2-4

大分県のニホンザルの生息分布および生息地の環境変化と猿害
長岡寿和（大分短期大学）

ニホンザルによる猿害発生の初期の原因の一つとして生息環境の森林伐採と人工林化が上げられている。ニホンザルの生息地域の大分県南海部郡本匠村米花山一帯の1990年度の森林簿から、過去のスギ・ヒノキ林の面積や分布と猿害発生報告の調査をした。新聞記事によれば猿害発生は1950年代初期から米花山周辺の集落に見られた。1950年代後半まで記事による猿害発生地域は広がったものの米花山周辺でのみであったが、1960年代には米花山からやや離れた因尾・堂ノ間など周辺の集落まで広がった。米花山一帯の森林面積は約 900 haで、林班総数が22班である。森林簿の林種別によるスギ・ヒノキの面積割合は1950年代は26%であったが、1960年代には47%であった。また年度ごとの各林班のスギ・ヒノキ林の面積が30%以上の林班は、1950年代は22林班中5林班であったが、1960年代には22林班中20林班に、1970年代にはすべての林班が40%以上になっている。このことから1960年代には少なくとも30%以上がスギ・ヒノキ林の林班が山全体に広がったことになる。

米花山周辺の森林では1950年代から1960年代にかけて山全体のスギ・ヒノキ林面積の増加とともに、生息域からかなり離れた地域まで猿害の記事が見られるようになっていた。これはスギ・ヒノキの人工造林化が山全体に広がるにしたがって、ザルの遊動域が拡大し、それがこの地域での猿害発生に結びつく要因になったと考えられる。

計画 2-5

野生ニホンザル群の糞中窒素濃度からの摂取蛋白質濃度の推定
久保田裕子（日獣畜大・野生動物）

野生ニホンザルの個体群動態は、栄養状態と大きく関わっていると思われる。本研究は、野生群の餌の栄養価を間接的に把握する方法を確立するために糞中窒素濃度を測定する方法を試みた。測定にはケルダール法を用いた。基礎実験として、5月（1995年）に本大学で飼育されているニホンザルで実験を行った。その結果、摂取した蛋白質濃度と糞中窒素濃度との間には相関が確認された。これが野生群に適用が可能であるかどうかの検討を行うため、神奈川県に生息する2群について用いた。その2群は、農作物への依存度が高い箱根群と依存度が低いと考えられる丹沢群を研究対象とした。

毎月1度、新鮮糞をランダムサンプリングした。その結果、今年度は2群あわせて80個の糞を採集した。窒素濃度分析は、手技の安定に時間を要し、現在、明確な結果は言えないが、いままでに終えた分析の結果からは、農作物の依存度が高い箱根群の方が、丹沢群より糞中窒素濃度が高い傾向が見られた。

今後は、本教室にて同法で分析を引き続き行い96年度の結果との比較するとともに、消化率に影響を及ぼす摂取繊維濃度についても検証し、野生群に適用させるために検討していく予定である。